

## 日10-130 (ショートコメント)

### 「ノルウェイの森」

\*\*\*

2010 (平成22) 年10月26日鑑賞<東宝試写室>

監督・脚本：トラン・アン・ユン

原作：村上春樹『ノルウェイの森』（講談社刊）

ワタナベ（大学生）／松山ケンイチ

直子（キズキの幼なじみ、恋人）／菊地凜子

小林緑（ワタナベの同窓生）／水原希子

キズキ（17歳の時に自殺したワタナベの親友）／高良健吾

永沢（ワタナベの寮の上級生）／玉山鉄二

レイコ（直子の友人）／霧島れいか

ハツミ（永沢の恋人）／初音映莉子

突撃隊（ワタナベの寮の同室人）／柄本時生

大学教授／糸井重里

2010年・日本映画・133分

配給／東宝

◆ なるほど、村上春樹の世界的ベストセラー小説『ノルウェイの森』とは、こんな物語だったのか。人間が生きていく上での心の喪失や悲しみ、そして、男女間の愛と性を赤裸々に語った青春文学だったわけだ。私があと40年若ければ、18歳の頃に読んだ柴田翔の『されどわれらが日々』のような愛読書になっていたかもしれないが、今さらそんな「文学」にひたる余裕はない。また、男女交際や恋愛についての学生時代の純真さを既に失い、「スケベおやじ」になってしまった今となっては、本作の若者たちが語る男女の愛や性についてのセリフが白々しいばかり・・・？

◆ 村上春樹の生年月日は1949年1月12日だから、同年同月26日生まれの私とほとんど同じ。したがって、早稲田VS阪大とタイプは違っても、大学に入学した1967年当時の若者としての感性は似たようなもの？大学入学と同時に始まる、恋と愛と性の遍歴は人それぞれだが、本作の主人公・ワタナベ（松山ケンイチ）の優しさとストイックさを今の若者はどう受けとめるの？自殺してしまった親友のキズキ（高良健吾）やそれによって喪失感を深め、療養所に入院してしまう直子（菊地凜子）、そして、共に療養所に入院している直子の友人レイコ（霧島れいか）らの暗さは1967年当時特有のものだと思うのだが、それが今の世界各国の若者はどのように理解するの？

◆ みずみずしい若さをもった女の子・緑（水原希子）にワタナベが惹かれたのは当然だが、同時にワタナベが緑によって振り回されることになったのは仕方なし？

他方、ワタナベの先輩で東大法学部に在籍し、外交官試験に合格した永沢（玉山鉄二）の生きざまのいやらしさも、みんなが上昇志向をもっていたあの時代特有のもの？「僕は結婚なんかしない」と公言し、「寝た女はせいぜい70人」と言うこんな男の恋人になったら大変だが、その恋人・ハツミ（初音映莉子）はこれからどんな風に生きていくの？

◆ 青春は貴重なもの。『若きウェルテルの悩み』的な悩みは誰にでもあるものだが、本作に登場する若者たちの悩みはかなり根深い。つまり、ここでも喪失、あそこでも喪失だ。結構つらい物語だが、これが世界各国の言葉に翻訳されて読まれているのをみると、恋や性についての若者の悩みは全世界共通ということだろう。

◆ ビートルズの曲である『ノルウェイの森』は、直子が大好きな曲。この曲を聞くと深い森の中で迷っているような気分になるけれども、一番好きな曲らしい。それを聞くと、いつも泣いてしまう直子は、「ワタナベがいれば大丈夫」と言っていたが、さて・・・？

◆ 村上春樹の世界的ベストセラーを映画化するのは、期待が大きいだけに大変。また、原作の方が良いか、映画の方が良いかの論争が必ず起こるから、余計大変。小説の中でもたくさん登場しているであろうワイセツかつ刺激的なセリフが映画の中でも次々と登場するが、文字上ではともかく、現実のセリフとして若者たちの口からそれがしゃべられる時、私にはかなり違和感が・・・。さて、あなたは？

2010 (平成22) 年10月27日記